

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和2年度学校評価 結果

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	白石町立有明東小学校
1 前年度 評価結果の概要	保護者アンケート、児童アンケート、それに教職員アンケート等をもとに取りまとめた結果、全体的には良好な評価結果であった。学力向上に向けた取組では、学力向上コーディネーターが中心となり、全国・県学習状況調査結果の分析から課題の把握、対応策の検討、そして、全職員共通理解のもと共通実践に取り組んできた。教職員アンケートで回答した『児童に「読む力」「書く力」「考える力」をつけるために工夫を凝らした授業に取組む』という項目がわずかに目標値に届かなかったため、次年度に向けての課題とした。児童の挨拶については、よく挨拶ができていた児童、よく挨拶ができていない児童、時間帯、場所等については、児童の実態を探りながら家庭や地域と連携した指導を行っていききたい。保護者や地域の本校教育に対する関心は高く、授業参観や学校行事等への参加が多い。また、コミュニティ・スクール実践校としても地域の教育力を様々な形で活用させていただいてきている。さらに、家庭・地域との連携を深めながら、本校教育を充実させる取り組みを継続していきたい。
2 学校教育目標	本校の歴史と伝統を重んじ、連続と受け継がれてきた「誠」の教育と、たくましい開拓・干拓精神の維持高揚に努めると共に知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな有明東小学校の子どもを育てる。

3 本年度の重点目標	①学力の向上（教職員の資質向上を含む） ②心の教育の推進 ③業務改善の推進と情報発信・地域との連携推進（学校運営協議会との連携推進）
------------	--

4 重点取組内容・成果指標				中間評価		5 最終評価		主な担当者
(1) 共通評価項目				中間評価		最終評価		
評価項目	重点取組	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	○学力向上対策シートに示したマイプラン（「読む力」「書く力」「考える力」の育成）の成果指標（4段階）の平均値が3.5以上になる。	・「読む力」「書く力」「考える力」の育成を意識し、児童の実態や学年の発達段階に応じた授業展開を工夫する。 ・週に1回、朝の時間を使って「読む力」「書く力」「考える力」の育成を目指した取組を行う。また、隔週1回、朝の時間を使って基礎的・基本的な内容の定着を図る。	B	・朝の時間は、「国算タイム」と名称を揃え、週2回取り組んだ。週1回は、級外等を配置し、複数人で指導に当たり、きめ細やかに対応した。 ・各学年の取組を紹介し合い、職員も学び合う機会を設けた。	A	・学力向上対策シートに示したマイプランの3つの力の成果指標（4段階）の平均値が、3.6となり、どの職員も児童の実態に沿って工夫改善を行うことができた。 ・職員間で、学習評価に対する認識を共有することが難しかった。また、学力向上対策シートの「読む力」を音読の力と捉えている場合もあり、同じ課題意識を持って取り組めたとは言えない。	学力向上コーディネーター 研究主任
	○学習内容の定着に向けた分かりやすい授業の実践	○学級の友達との話し合い活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると回答した児童が90%以上	・主体的、対話的で深い学びとなるような授業展開を意識し、課題設定や発問を工夫する。 ・安心して発言できる支持的風土を醸成するために、様々な機会を捉えて指導に取り組む。	C	・子どもが自分で解法を見いだすことができるようなディフェンス調整や問題提示を工夫することができた。 ・ソーシャルディスタンスに配慮しながら、話し合い活動などの場面を徐々に取り入れて、学び合う機会を設定していく。	A	・4～6年生の佐賀県学習状況調査において、6年社会を除くすべての教科で県平均を上回ることができた。各授業中に「考えを述べよう」「相手の考えを読み取る」という発問を意識して行ってきた成果と言える。 ・「考えることが楽しい」と答えた児童が81.1%と目標値より低くなっている。従前より、より具体的に思考し伝達しようとする段階ではこのような結果となることも多いので、より俯瞰で自分を捉えることができている経過とも受け取れる。今後さらに丁寧に指導を積み重ねていく。	学力向上コーディネーター 研究主任
●心の教育	●挨拶の奨励	○いつでも、どこでも、気持ちのよいあいさつができる児童の割合を90%以上にする。	・定期的な地区ごとの挨拶運動を実施する。 ・定期的な挨拶について振り返る時間を設けることで、挨拶への意識を高める。	-	・コロナウィルス対策のため、地区ごとのあいさつ運動は、実施できなかった。2学期からは、実施していく。 ・2学期からは、さらに挨拶の意識を高めるために、月に1回自分の挨拶を振り返ったり、「あいさつあいさつカード」を書いて振り返る時間を設けていく。	C	・2学期からあいさつ運動をスタートした。低学年を中心に挨拶ボランティアに取り組む姿が見られた。 ・あいさつ運動などの場では、挨拶の声が聞こえるが、あいさつに対する意識が低く、日常化できていない。	特別活動部
	●いじめの実態把握（早期発見、早期対応体制の充実）	○「いじめをしている」「いじめを受けている」児童0を継続する。	・定期的な調査（職員・児童・保護者対象）を行い、児童の実態を掴む。 ・いじめ事例が発生したときには、ケース会議を開き、組織として対応した。	C	・実態調査・児童理解連絡会は、定期的に行うことができている。 ・いじめ事例が発生したときには、ケース会議を開き、組織として対応した。	C	・アンケート調査・児童理解連絡会・SCとの連携など具体的な取組を行ってきた。 ・いじめのとりえ方に対する研修会を行なったことで教職員の意識改革ができた。小さな事例を見逃さないシステム化を考えていきたい。	特別活動部
	◎目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の取り組み	◎「自他の良さを認め合い、共に高め合う児童の育成」を研究主題とした校内研究のまとめ段階におけるアンケートで自己肯定感の高まり具合について尋ねる項目において、「高まった」あるいは「まあまあ高まった」と答える児童が85%にする。	・研究授業を通して「自他の良さを認め合い、共に高め合う児童」を育成する授業の在り方についての研修を深める。また、研修したことを日常の授業にも活かしていくように努める。 ・日常の学習や生活場面において、児童の良さを認め、認めながら指導・支援にあたる。	B	・外部講師を招聘し、授業研究会及び職員研修を実施した。すぐに講師提案の授業に取り組む、子どもたちの自他のよさを認め合う機会を設けたクラスもある。 ・特別の教科道徳の時間のみならず、教育活動全体での指導・支援の機会を捉えて、効果的に継続していく必要がある。	B	・12月実施アンケートにおいて、「自分のよさを見つけることができているか」の問いに対し、「そう思う」「だいたいそう思う」と答える児童が78%だった。この項目は「高まり」ではなく、「自己肯定感そのもの」を見る内容であり、個人の変容を問うことはできない。しかし、「そう思う」と答える児童が、25%（6月）→35%（12月）と10%増加していた点からも、より肯定的に捉える児童が増えてきていると思われる。 ・今後は、個人の良さを認める教師の力量をあげる研修も効果的に行っていきたい。	研究主任 教務主任
●健康・体づくり	●望ましい生活習慣の形成	○テレビやゲーム、ネットなどのメディア機器を使用する際の約束を家庭で決め、守っている児童の割合を80%にする。	・連絡帳などに、チェック項目を作成し、児童に意識付けをさせる。 ・学級通信や保健便り、メディア依存について啓発する。 ・保護者向けに、外部講師を呼んで、メディア依存についての講話を行う。	C	・メディア機器を使用する際の約束を家庭で決め、守っている児童の割合は9月のアンケートの結果65%であった。（5月は49%）個人面談で各担任がメディア依存の危険性について話をしたり、学級通信や保健便りで保護者への啓発をしたりした。今後も継続していき、目標値までに近づきたい。	B	・1月のアンケートの結果、メディア機器を使用する際に、約束を家庭で決めていた児童の割合は、83.5%であった。その中で、その約束を守っている児童の割合は89.5%であった。目標値を達成した。学校での指導や声かけ、おうちの方のご協力、児童の意識の変化がこの結果につながったと感じる。	生活指導部
	●安全に関する資質・能力の育成	○廊下右側歩行率を90%以上にする。 ○道路で飛び出さず、左右確認をする児童を95%以上にする。	・定期的な調査を行い（児童、職員、保護者）、意識の向上と習慣化を図る。 ・月の生活目標との関連を図る。 ・交通安全教室を実施する。 ・地区児童会や終業式等で啓発をする。 ・最上級生である6年生が模範となるように、指導する。	C	・廊下右側歩行は意識できている児童が93%である（常時15%、だいたいできている75%）。視覚的に右側歩行を意識できるよう、廊下の一部に矢印を貼る。 ・道路での左右確認を意識できている児童が99%である（常時84%、だいたいできている15%）。コロナウィルス対策で実施できなかった交通安全教室を実施する。	B	・廊下右側歩行は意識できている児童が100%である（常時75.6%、だいたいできている24.4%）。視覚的に右側歩行を意識できるよう、廊下の一部に矢印を貼ることで意識できた児童は72%であった。 ・交通安全教室を実施した。道路での左右確認を意識できている児童が99.2%である。（常時95.7%、だいたいできている4%） ・どちらの項目も定期的に振り返りをする中で、意識する児童が増えた。	生活指導部
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務の効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●時間外在校等時間（月45時間、年間360時間）を遵守する。	・定時退勤日を設定する。（毎週金曜日） ・長期休業中に学校完全休業日を設定する。	A	・毎週金曜日の定時退勤と夏季休業中の学校完全休業日は実施することができた。9月までの時間外在校時間の平均時間は、32.48時間であった。日々の退勤時間がやや遅くなってしまいう職員が数名見られた。	A	・時間外在校時間月45時間内を遵守することができた。（月平均31.81時間）11月に実施した業務改善強化月間においては、個々の働き方についての振り返りを共有することができた。冬季休業中に学校完全休業日を1日設定し、実施した。	教頭
	○業務内容の情報共有化	○職員間で業務内容の情報共有を図り、効率的な業務遂行の取り組みを推進する。	・校内の共有フォルダを整理し、業務に必要なデータ蓄積と共有を行い、効果的に活用することで効率的に業務を行う。	C	・校務用フォルダへのデータ蓄積及び共有等、効果的な活用とまでは至っていない。共有フォルダ内のデータ等を紹介し合い、活用等にも触れていく。	B	・共有フォルダ（校務用、教材）内のデータを授業時に使うことができた。さらに、データ蓄積と効率的な活用につながるような運用を目指していく。	教頭
(2) 本年度重点的に取り組む独自評価項目				中間評価		最終評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	
○特別支援教育の充実	○職員の専門性と意識の向上	○特別な支援が必要な児童について、全職員で共通理解を図り、適切な支援を行う。	・特別支援に関する研修会を実施する。 ・ケース会議を開催し、情報を共有する。 ・「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」の活用を図る。 ・「かけはしノート」を活用して保護者との連携を図る。 ・SAの先生と連携して支援していく。	B	・特別な支援が必要な児童について、全職員でインシデントプロセス法での研修会を実施した。 ・必要に応じてケース会議開催し、対応策を講じ支援に当たっている。	B	・支援が必要な児童について「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」を作成しているが、十分な活用に至っていない。 ・支援が必要な児童についての情報を、職員で共通理解しているが、支援の難しい事例があり、十分な支援ができなかった。	特別支援教育担当

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育

5 総合評価・次年度への展望	・学力向上に向けた取組では、学力向上コーディネーターが中心となって、県学習状況調査結果の分析から課題の把握、対応策の検討等、全職員で分担して研修を行った。教職員アンケートの項目『児童に「読む力」「書く力」「考える力」をつけるために工夫して授業を行う』では、昨年度届かなかった目標値を超えた。日々の指導により、学習状況調査の結果も良好であった。 ・挨拶の奨励について、挨拶運動を計画し、実施すると互いに挨拶を交わすことができているが、普段はなかなか挨拶はできていない状況にある。挨拶をすることのよさ、すばらしさを授業や各活動において価値付けをしていかなければならない。家庭での挨拶も十分にできている状況ではないので、保護者への働きかけも積極的に行っていきたい。 ・感染症対応等で、これまでになかった学校、PTA諸行事等の中止、縮小で、児童、保護者、さらには地域の方々も残念に思っておられたと思う。引き続き、児童の健康安全面を第一に考え、学校としての取組を進めていかなければならないと考える。
----------------	--